

ご挨拶

留学生活もいよいよ大詰めを迎え、毎月提出してきたこのレポートを執筆するのも、ついに今回が最後となりました。出発前、福井を離れる際に感じていた「一年間」という月日は、果てしなく長い道のりのように思えたものです。しかし、いざ異国の地に身を投じてみれば、毎日は新しい発見と挑戦の連続であり、時間は驚くほどの速度で過ぎ去っていきました。特に帰国を目前に控えたこの数ヶ月間の時の流れの速さは、これまでの人生の中でも類を見ないほどでした。慣れない英語での講義、グループワークでの文化的な衝突、そしてそれを乗り越えて得た仲間との絆。これら一つひとつの経験が積み重なり、現在の自分を形作ってくれたと実感しています。最後となる本レポートでは、留学の締めくくりとなった活動についてご報告いたします。

イースター休暇：キリスト教文化の体験と家庭の温もり

私の通う大学はキリスト教の伝統を重んじる教育機関であるため、四月には「イースター（復活祭）」に伴う一週間弱の休暇がありました。キリスト教圏において、イースターはキリストの復活を祝う非常に重要な行事です。この時期、街中やキャンパス内は卵やウサギのモチーフで彩られ、春の訪れを祝う独特の活気に包まれます。

この休暇中、ペンシルベニア州ピッツバーグにあるルームメイトの自宅に招かれました。アメリカの一般的な家庭で伝統的なイースターを体験できたことは、文化を内側から理解する上で非常に貴重な機会となりました。

特に印象に残っているのは、家族全員で行った「卵染め」と「エッグ・ハント」です。色鮮やかに染めた卵を家中に隠して探し出す遊びは、現地の子供たちにとっては欠かせない行事です。また、伝統的なイースター・ブレッドを一緒に焼く時間は、キッチンに漂う香ばしい匂いとともに、アメリカの家庭の日常を肌で感じるひとときとなりました。

滞在中、以前もお会いした親戚の方々にも再会することができました。別れ際に「いつでも帰っておいで」と温かい言葉をかけていただいたときは、胸が熱くなりました。国籍や文化が違って、これほどまでに深い信頼関係を築けたことは、私の留学生活における大きな収穫です。



Fukuvi USA 会社見学：福井企業のグローバル展開とマネジメント

今回の留学中、自身の専門分野であるマネジメントと郷土・福井がリンクする機会として、「Fukuvi USA (フクビ・USA)」を訪問しました。福井県に本社を置くフクビ化学工業は、建築資材の分野で高い技術力を誇ります。その現地法人を実際に目にすることは、将来マーケティングや管理職を目指す私にとって、大変意義深い学びの場となりました。

工場の歴史について説明を受けた後、実際に製造現場を見学させていただきました。「押出プラスチック」が製品へと形を変えていく工程を一から目視できたのは、今までにない貴重な体験でした。マネジメントの観点で特に感銘を受けたのは、「自社ブランド製品」と「OEM製品」で管理方法を明確に使い分けている点です。品質基準や納期管理など、それぞれの特性に合わせて最適なシステムを運用している点は、日本のものづくりの緻密さを象徴していると感じました。また、工場内が非常に清潔で管理が行き届いている様子からも、生産管理の重要性を再認識しました。

さらに、市場動向についても学びがありました。日本の住宅関連市場が縮小傾向にある一方で、アメリカ市場では依然として強い需要があるという事実は、今後の研究対象として非常に興味深いものです。なぜこれほどまでに市場構造が異なるのか、日米の文化や制度の違いを含め、今後さらに深く掘り下げていきたいと考えています。

何より、社員の皆様が私たちのプレゼンテーションに熱心に耳を傾け、温かく迎え入れてくださったことに深く感謝しています。

プレゼンテーション：成長の捉え方と「キャパシティ」の選択

Fukuvi USA でのプレゼンテーションやスピーチ大会では、この一年間の学びの集大成として二つの考えを共有しました。

一つ目は、「成長とは螺旋（らせん）階段のようなものである」という視点です。

留学中、「自分は進歩していないのではないか」と不安になる時期がありました。しかし、真上から見れば同じ地点を回っているように見えても、横から見れば確実に一段ずつ高いところへ登っている。かつてと同じミスをしたとしても、そこからの学びや視座は変わっているはずだという考え方は、自分自身の支えとなりました。

二つ目は、「キャパシティ（容量）と向き合う勇気」についてです。

私はこの留学を決意した際、日本で持っていた内定や研究など、それまで積み上げてきたものを一度手放してアメリカへ来ました。何かを得るためには、現在の自分のキャパシティから何かを捨てるという「取捨選択」が必要になる場面が必ずあります。今回の選択が正しかったと思える結果を出せたことは自信になりましたが、同時に、結果だけでなく「悩み抜いたプロセス」そのものに価値を置ける大人になりたいと強く感じました。

Sanno America Inc. でのスピーチ：言語の先にある「意思」

また、ピッツバーグ近郊の「Sanno America Inc. (株式会社サンノアメリカ)」にてスピーチを行う機会をいただきました。ここでは日米の教育システムの違いを例に挙げ、アメリカの実践重視のスタイルと、日本の基礎重視のスタイルの相違について論じました。

最終的には、「言語はあくまでツールであり、目的ではない」という点を強調しました。英語を流暢に話すこと以上に、その道具を使って何を伝えたいのかという「意志」の重要性を、この一年間の葛藤を通じて学びました。



最後の Choir コンサート

留學生活において、最も参加してよかったと感じているのが Choir（合唱）の授業です。その締めくくりとして、地元のプロオーケストラと共に開催された最終コンサートは、非常に感動的なものとなりました。

プログラムには、春休みのドイツ・チェコ遠征で歌った曲や、留学当初に必死で練習した曲が並びました。イントロが流れるたびに当時の光景が鮮明に蘇り、これまでの歩みを再確認することができました。一つの授業を通じてこれほどまでに深い思い出を共有し、国境を越えた仲間ができたことは、私にとって何物にも代えがたい経験です。この公演で最後となるメンバーと共にソロを歌い上げることができたことは、一生の思い出となりました。



まとめ：今後の展望

この一年間、福井県奨学生としてアメリカで過ごした日々は、私の価値観を大きく変えるものとなりました。異文化の中で自分を相対化し、新たな視点を得られたことは、これからの人生における確固たる基盤になると確信しています。

Fukuvi USA で見学した高度な生産管理、地域の人々との交流、そして仲間と創り上げたコンサート。これらすべての経験から学んだのは、技術やスキルの重要性はもちろんのこと、それらを支える「誠実な管理」と「人との繋がり」の大切さです。

今後は、この留学で得た知見や国際感覚を、大学でのマーケティングやマネジメントの研究に活かすとともに、将来は福井県、そして社会全体に貢献できる人材になれるよう、一層努力を重ねていく所存です。自分の限界と向き合い、悩み抜いたこの一年のプロセスを糧にして、一步ずつ着実に前進していきたいと思います。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった福井県の関係者の皆様、そして支えてくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

一年間、本当にありがとうございました。

以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu